

人心に配慮した北陸の電気事業者統合

水資源は地域の財産です。豊富な水力を求めて侵攻する都市大電力に対し、北陸の電気事業者同士が統合^{*1}して経営基盤を強化して対抗しましたが、地元同士の経営統合は地域の人心に配慮されたものでした。

1928年（昭和3）、富山電気が小松電気を子会社化した時、小松電気の織部社長は富山電気への合併を望みましたが、富山電気は加賀の人々の気持ちに配慮し、小松電気の株の大半を富山電気が保有することで関係会社として小松電気の名を残すとともに、富山電気の社名を改称し、日本海電気としたのです。

ほかにも富山電気は、能登一帯に電気を供給する能登電気からの提携を要請された際に、提携ではなく合併を選択しました。1926年（大正15）の合併後、富山電気は能登地域の産業振興を企図し、能登に新たな送電線を建設、低廉な工業用電力の供給を目指しました。これにより、合併から3年後の1929年（昭和4）4月には、地元資産家と磐城セメントとの共同出資によって設立された七尾セメントが操業を開始しました。七尾セメントでは、日本で初めてロータリーキルン2基による本格的な湿式焼成法が採用^{*2}されました。

*1 日本海電気が統合した電気事業者は、羽咋電気、能登電気、中越水電、大聖寺川水電、越前電気、黒部川電力、小松電気など。

*2 住友大阪セメント株式会社（2008）『住友大阪セメント百年史』



小松電気本社



能登電気本社



北陸電力
アーカイブギャラリー

Hokuriku Electric Power Company 北陸への思い
ARCHIVE GALLERY